

某大学学生の「死」に対する意識

—死因と寿命に関する調査から—

藤 沢 邦 彦・栗 原 淳*

The Student's Consciousness For "Death" The study about the cause of death and the life

Kunihiko FUJISAWA, Atsushi KURIHARA*

Recently, the health education is trying to instruct the more positive way of life through the studying of "death", which was tabooed problem taking in education before. So, we did this study in order to have these basic data.

The survey on the consciousness for "death" was conducted with 631 college students (male : 534, female : 97) by the questionnaire method. Questions were the life, the cause of death, and the reasons which students forecasted, and which they hoped.

The following results obtained :

- 1) The chief items of the cause of death which college students forecasted were "cancer", "senility", "heart disease" and "cerebrovascular disease".
- 2) The life expectancy forecasted by college students were 65.7 (male) and 67.6 (female). Both of them were lower than the life expectancy of Japanese.
- 3) The chief reasons of the cause of death or the life forecasted by college students were "heredity", "constitution" and "behavior of life".
- 4) The chief items of the cause of death hoped by college students were "senility", "heart disease" and "unexpected accidents".
- 5) The life expectancy hoped by college students were 72.9 (male) and 69.1 (female). Both of them were over the life forecasted, but were lower than the life expectancy of Japanese.
- 6) The chief reasons of the cause of death or the life hoped by college students were "don't feel like dying painfully", "feel like dying peacefully or calmly" and "don't want to put others to troubles".

All this, the college student's consciousness of the death was not appropriate to the life and the cause of death. So, it is necessary to approach the college students to change these consciousness.

I. 緒 言

わが国において、一般に死の問題は古くからタブーであり、とくに教育の場で死の問題が正面から取りあげられたことはほとんどなかった。しかし最近になって、デス エデュケーション(Death

Education)として、この死の問題を中心に据えた教育の必要性が主張されてきている。A・デーケン等による「生と死を考える会」の活動がその主張の母体であろう^{1)~4)}。ここでいう死の問題は単に人生の末路だけの問題ではなく、死を迎えるまでの過程の問題であり、換言すれば「いかに生きるか」ということである。従って、「死の準備教育」

* 体育研究科研究生

や「生と死の教育」⁵⁾と称される教育は生命尊重を理念とする健康教育の一領域に他ならないと言える。

健康教育において「死」を学ぶ意義は、いかに素直に、穏やかに死を迎えるかということを経験すべき死のために学ぶこともあるが、やはりいかに凜々しく、豊かに生きるべきかということを経験から学ぶことである。

人々の死に対する意識は、死に自らが直面している状況下では否応無しに高められるが、たとえ死に直面している状況下でもそれが自らの問題でなかったり、逆に自らの問題であっても死に直面していなければ、あまり高まることはないであろう。近頃マスコミでしばしば取りあげられる若者の自殺、がんの末期患者のホスピス、脳死など死に直面した問題も、情報の受け手が自らの問題にし得なければ、興味本位や無責任な関心の高揚に終ってしまい、マスコミの取りあげ方の功罪が問われることになる。また、やがて自らの死に結びついていくような不健康な生活をしていながら、状況が死に直面していないばかりに死に対する意識が高くない者も少なくない⁶⁾。

死に対する意識は、人々の間に死に対する誤解、無知、無関心、不安などがみなぎっている場合は、絶望、恐怖、死へのあこがれ等を生み出さないために無闇に高められるべきではない。まず、人々の生きることに対する欲と社会における生命尊重の理念をしっかりと築いておくことが必要であろう。

大学生の「死」に対する意識の実態は今まではほとんど明らかにされていないが、大学保健教育において、「健康生活の設計」など人の生き方に関わる教育内容もみられるため、教授上の基礎的資料を得ることを目的に調査を実施し、若干の知見を得たので報告する。なお、ここでいう意識とは、河上利勝が「自分が自覚し、今、何を考え、どんな行動をしているか、どんなことが周囲に起っているか、体験によってよく知っていること」⁷⁾と定義しているように、その人が持っている知識や経験に基づいて自覚していることであり、意識の実態を知ることによって、その人の知識や経験の様子から考えや行動の一部をある程度推しはかり得ると考えられる。

II. 研究方法

大学生の「死」に対する意識の実態を把握するため、次のような調査を実施した。

1. 調査対象：都内某私立大学文科系第一学年学生631名（男子534名、女子97名）
2. 調査時期：昭和61年6月
3. 調査方法：当該大学の保健理論の講義時間を利用し、記名で質問紙による調査を行なった。なお、回答のヒントを与えるために調査以前の講義において日本人の寿命や死因について簡単に解説した。
4. 調査項目：調査項目の設定について、井上忠の「死への問いは、われわれ自身を巻き込むが故に、それはもはやたんなる観察される事実の問題では済まなくなる。死の主語には、ほかならぬわれわれひとりひとりが、自分自身を据えなければならぬことになる。」⁸⁾という考えをふまえて、死を「自分の直面する問題」としてつよく意識させることを意図し、次の6項目について調査した。

- 1) 自分の予測寿命
- 2) 自分の予測死因
- 3) 予測の理由（複数回答可）
- 4) 自分の望む寿命
- 5) 自分の望む死因
- 6) 望む理由（複数回答可）

III. 結果並びに考察

調査の結果を、死の予測からみた意識と、望む死に方からみた意識の二つの視点から分析検討した。

1. 死の予測からみた意識の実態

学生が自ら予測した寿命は図1の通りである。20歳代から年代を増すにつれて徐々に予測者も増えており、男女とも70歳代を予測する者が最も多くなり、80歳代以上を予測する者は急激に減っている。平均すると男子65.7歳、女子67.6歳であり、これを昭和59年のわが国の平均寿命である男子74.5歳、女子80.2歳と比較すると、男子は8.8歳、女子は12.6歳も学生の予測寿命の方が短い。近年、わが国の平均寿命の延長ペースが鈍ってきているといわれながらも年々少しずつ伸びているが、大学生の予測寿命は非常に悲観的数値を示している。

次に、学生が自ら予測した死因は表1の通りで

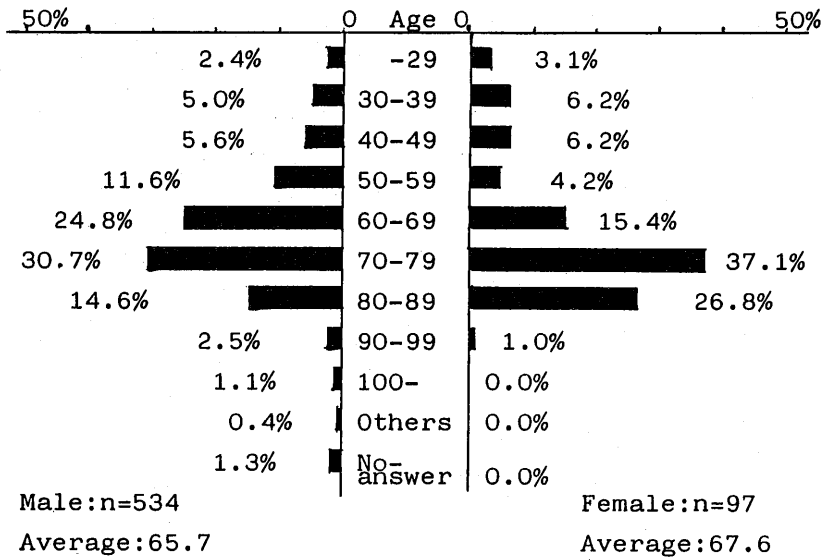


Fig.1 Actual state of the forecasted life

Table 1 Actual state of the forecasted cause of death (%)

Items	Sex	Male	Female	Total
		n=534	n=97	N=631
1. Cancer (except lung cancer)		25.3	28.9	25.8
2. Senile decay		14.4	21.6	15.5
3. Lung cancer		14.0	2.1	12.2
4. Heart disease		12.5	7.2	11.7
5. Cerebrovascular disease		10.3	12.4	10.6
6. Traffic accident		5.8	10.3	6.5
7. Unexpected accident (except traffic accident)		2.9	3.1	3.0
8. General disease		2.2	5.2	2.7
9. Hypertention		2.1	2.1	2.1
10. Death in battle		1.7	1.0	1.6
11. Pneumonia, Bronchitis		1.5	2.1	1.6
12. Cirrhosis, Liver disease		1.3	1.0	1.3
13. Diabetes		1.1	0.0	1.0
14. Commit suicide		0.9	0.0	0.8
15. Nephritis, Nephrotic syndrome		0.6	2.1	0.8
16. Murder, Assassination		0.7	0.0	0.6
17. Enthanasia		0.4	0.0	0.3
18. The others		1.3	0.0	1.1
19. No answer		0.7	1.0	0.8

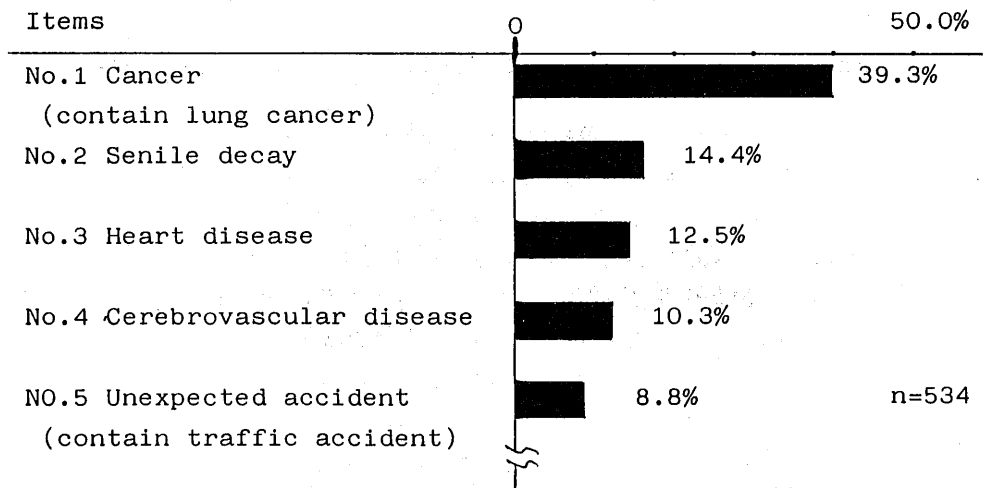


Fig. 2 Male's forecasted cause of death: above 5 items

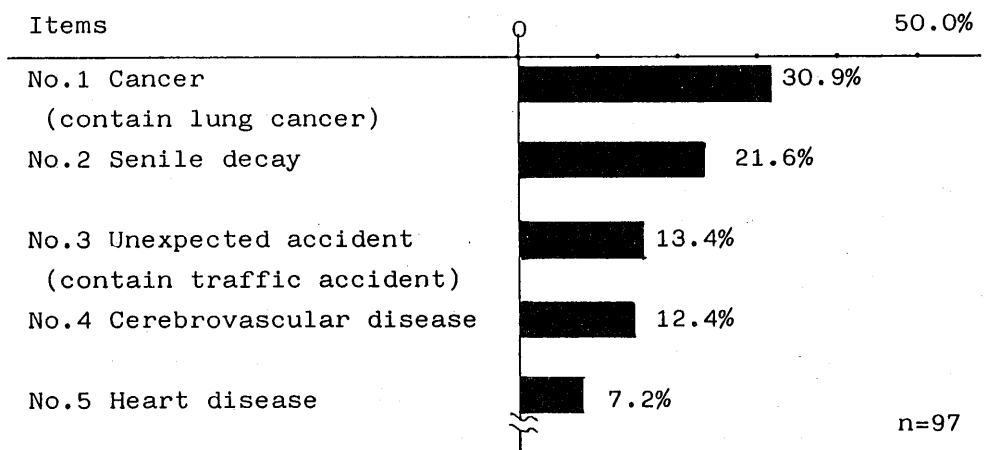


Fig. 3 Female's forecasted cause of death: above 5 items

ある。また、あげられた死因のうち上位のものを図示したのが図2、図3である。男子の場合、第1位が「悪性新生物(肺がんを含む)」39.3%で最も多く、2位「老衰」14.4%、3位「心疾患」12.5%、4位「脳血管疾患」10.3%、5位「不慮の事故(交通事故を含む)」8.8%の順になっているが、厚生省の確率統計⁹⁾では、20歳男子の場合、やはり1位が「悪性新生物」で23.8%と順位は同じであるが、以下2位「心疾患」19.2%、3位「脳血管疾患」19.1%、4位「肺炎、気管支炎」8.2%、5位「老衰」4.6%、6位「不慮の事故」3.1%であり、順位ばかりか比率も両者に違いがみられる。学生個人の予測と厚生省の集団の確率を直接比較するこ

とはできないが、男子学生の死因についての予測では「悪性新生物」「老衰」「不慮の事故」が強く意識され、「心疾患」「脳血管疾患」「肺炎・気管支炎」は厚生省の統計を下回るほどの予測でしかない。女子の場合、第1位が「悪性新生物(肺がんを含む)」30.9%、2位「老衰」21.6%、3位「不慮の事故」13.4%、4位「脳血管疾患」12.4%、5位「心疾患」7.2%の順であるが、やはり厚生省の確率統計でみると、1位が「脳血管疾患」22.8%、2位「心疾患」21.9%、3位「悪性新生物」16.2%、4位「老衰」9.5%、5位「肺炎・気管支炎」6.9%であり、「不慮の事故」は1.7%で8位である。男

子同様、「悪性新生物」「老衰」「不慮の事故」に対する意識が強く、「脳血管疾患」「心疾患」に対する予測は厚生省の統計をかなり下回る程度の意識しかもっていない。以上の他、「自殺」については学生の予測が男子0.9%、女子0%であるのに対し、厚生省の統計では男子2.4%、女子1.4%であり、学生の予測の方が低いこと、また「安楽死」「戦死」といった厚生省の確率統計にみられない死因をあげている学生がいること等が注目される。

次に、学生が自らの寿命や死因を予測した根拠を予測理由としてあげたものが、表2である。男女とも、近親者の死を回想して「遺伝、家系」といった先天的な理由を最も多くあげ、次いで自分の健康状態から「その徴候をもっている」という体質的な理由が多くあげられた。3位は男子が「過度の喫煙」、女子は「不適切な食生活」といった自らの生活態度的な理由であった。他にあげられた理由をまとめてみると、「公害」「社会情勢」のような社会的な理由、「一般的傾向だから」「なんとなく」のような不明確な理由、「占い等」のような運命論的な理由などがみられた。

予測理由は複数回答可として調査したが、複数回答した者は少なく、あげられた理由は平均し、

1.1個であり、多くの者が死に至る過程をかなり単純にしか考えていないことがわかった。

次にあげられた主な予測死因ごとに、それぞれの予測寿命及び予測理由との関連をみてみた。予測死因として「肺がん」をあげた者77名の予測した寿命は27歳から100歳に亘っており、平均して63.0歳であった。そして予測理由は「過度の喫煙」をあげている者が77名中69名(89.6%)にのぼっており、喫煙と肺がんを直結して考えている者が非常に多い。予測死因として「悪性新生物(肺がんを除く)」をあげた者163名の予測した寿命は32歳から100歳に亘っており、平均66.5歳であった。そして予測理由は「遺伝・家系」39.3%、「徴候をもっている」20.2%「一般的傾向だから」15.3%などであり、近親者のがんによる死の影響が大きくあらわれているようである。

予測死因として「心疾患」をあげた者74名の予測した寿命は29歳から100歳に亘っており、平均65.0歳であった。そして予測理由は「徴候をもっている」39.2%、「確率の高い生活をしている」25.7%などであり、健康診断や生活点検といった健康管理の必要性がうかがえる。

予測死因として「脳血管疾患」をあげた者67名の予測寿命は30歳から100歳に亘っており、平均

Table 2 Actual state of the forecasted reason (%)

Items	Sex		
	Male n=534	Female n=97	Total N=631
1. Heredity, Lineage	20.2	39.2	23.1
2. Have a symptom	18.5	13.4	17.7
3. Excessive smoking	12.9	1.0	11.1
4. Unappropriate eating style	8.8	8.2	8.7
5. General tendency	6.7	6.2	6.7
6. Intemperance	6.4	3.1	5.9
7. Healthy	5.6	6.2	5.7
8. Reckless character	3.6	6.2	4.0
9. Social conditions	3.0	3.1	3.0
10. Dream, Luck, Prophecy, Palm	2.6	4.1	2.9
11. Excessive stress	3.2	0.0	2.7
12. Natural term of life	2.1	5.2	2.5
13. Public nuisance	2.4	2.1	2.4
14. Moderation	2.2	0.0	1.9
15. Live on high probability	2.1	1.0	1.9
16. Excessive drinking	2.1	0.0	1.7
17. Injurious substance in food	2.1	0.0	1.7
18. Excessive work	1.7	0.0	1.4
19. In some way	4.5	3.1	4.3
20. The others	2.4	0.0	2.1
21. No answer	1.1	1.0	1.1

68.4歳であった。そして予測理由は「徴候をもっている」29.9%、「遺伝・家系」28.3%、「不適切な食生活」23.9%などであり、やはり健康診断や食生活の点検といった健康管理の必要性がうかがえる。

予測死因として「老衰」をあげた者98名の予測寿命は47歳から100歳に亘っており、平均は最高の80.8歳であった。そして予測理由は「丈夫である」31.6%、「遺伝・家系」24.5%などであり、健康に対する自信と近親者の長寿が影響していると思われる。

予測死因として「交通事故」をあげた者41名の予測寿命は18歳から100歳に亘っており、平均49.5歳で他の死因に比して短い。そして予測理由は「無謀な性格」51.2%、「確率の高い生活をしている」22.0%などであり、かれらがバイクの運転などかなり危険な生活をしていることがうかがえる。

以上のような大学生の死の予測の実態をみると、寿命の予測及び死因の予測とも、わが国の実際の傾向や理論的傾向から遊離している。また、予測理由も単一的であり、死に影響を及ぼす要因についても、科学的に認識しているとはいえない。この誤った予測は大学生の死に関する知識や経験が誤っていたり、片寄っていたり、乏しいことに

起因していると考えられる。

2. 望む死に方からみた意識の実態

学生が望んでいる寿命は図4の通りである。年代を増すにつれて望む者の数が増えており、男女とも70歳代を望む者が最も多く、80歳代、90歳代を望む者が減少し、100歳以上では全体の6.2%となっている。平均すると男子72.9歳に対して、女子は69.1歳で男子を下回っており、これを昭和59年のわが国の平均寿命と比較すると、男子1.6歳、女子11.1歳も学生の望む寿命の方が短い。またかれらの予測寿命と比較すると、望む寿命の方が男子7.2歳、女子1.5歳上回っていることは好ましい傾向といえるが、その望む寿命が実際の平均寿命を下回っていることは好ましくぬ傾向である。とくに女子の望む寿命が目立って低いことが注目される。

次に学生が望む死因は表3の通りである。また、あげられた死因のうち上位のものを図示したのが図5、図6である。男子の場合、最も多くあげられたのが、「老衰」51.1%であり、次いで「心疾患」14.4%、第3位「不慮の事故」11.4%、第4位「脳血管疾患」4.5%、第5位「他殺、暗殺」3.0%の順である。これを厚生省の確率統計に照らしてみると、その順位や比率において大きな相違がみら

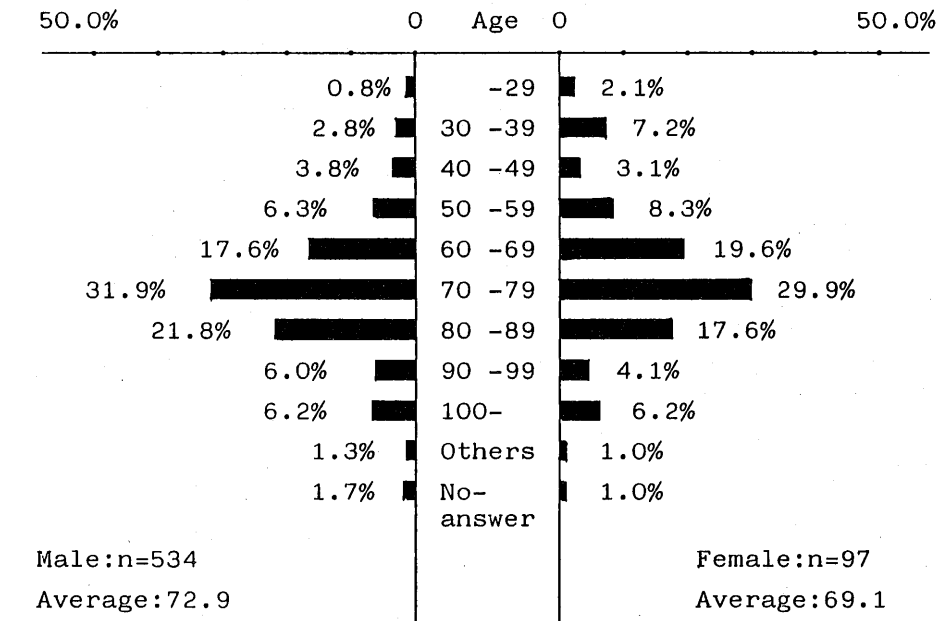


Fig. 4 Actual state of the hoped life

Table 3 Actual state of the hoped cause of death (%)

Items	Sex	Male	Female	Total
		n=534	n=97	N=631
1. Senile decay		51.1	36.1	48.8
2. Heart disease		14.4	26.8	16.3
3. Unexpected accident		11.4	10.3	11.3
4. Cerebrovascular disease		4.5	13.4	5.9
5. Commit suicide		2.6	3.1	2.7
6. Murder, Assassination		3.0	0.0	2.5
7. Disease dying at once		2.2	3.1	2.4
8. Cancer		2.2	2.1	2.2
9. Death in battle		1.7	2.1	1.7
10. General disease		0.9	3.1	1.3
11. Euthanasia		1.3	0.0	1.1
12. Another disease		0.9	0.0	0.8
13. The others		0.9	0.0	0.8
14. No answer		2.6	0.0	2.2

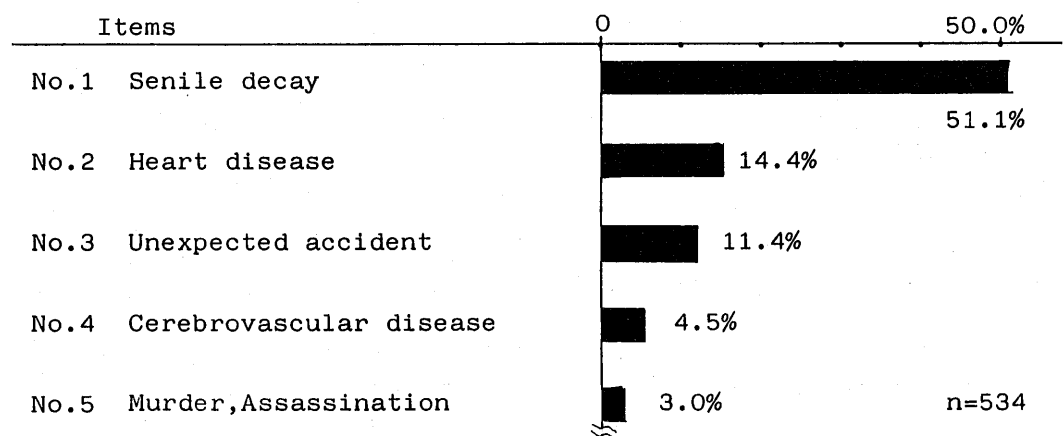


Fig. 5 Male's hoped caused of death : above 5 items

れる。とくに、「老衰」については厚生省の統計ではわずか4.6%であるのに、学生は51.1%の者があげているのが目立つ。女子の場合、やはり「老衰」が36.1%で最も多く、次いで「心疾患」26.8%、第3位「脳血管疾患」13.4%、第4位「不慮の事故」10.3%、第5位「自殺」「すぐ死ねる病気」「病気一般」各3.1%の順になっている。男子同様「老衰」を望む者が多いが、確率統計では女子は9.5%ではない。「悪性新生物」「安楽死」「戦死」「その他の病気」などの死因をあげている者もいるが全体に占める割合は少ない。とくに「悪性新生物」は予測死因において、最も多数の者があげた死因であるが、できれば「悪性新生物」で死にたくないと考えている者が多いことがわかる。これはがん

に対する恐怖心が新聞、テレビばかりか遺稿集¹⁰⁾¹¹⁾などによってかなり高められていることと関連があると思われる。

次に、学生が望む寿命や死因をあげた根拠を望む理由としてまとめたのが表4である。1人平均1.6個の理由をあげており、予測の場合よりも、死に方に対して望むことが多いことがわかる。男子の場合、最も多くあげられた理由は「苦しい死に方をしたくない」35.6%であり、次いで「静かに、安らかに死にたい」17.4%、第3位「迷惑をかけたくない」12.2%、第4位「天命・自然にまかせたい」10.9%、第5位「寝ている間に死にたい」9.0%の順である。女子の場合、最も多い理由はやはり「苦しい死に方をしたくない」52.5%であり、

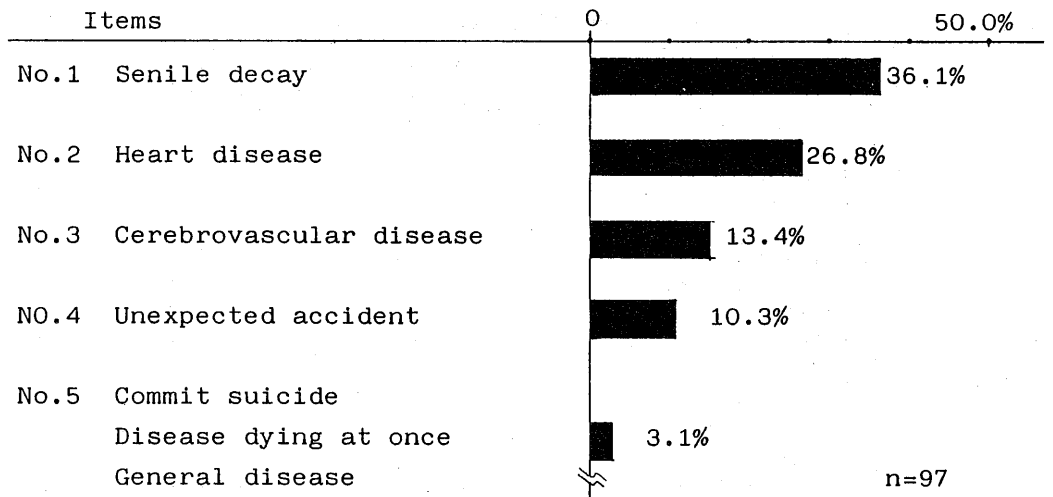


Fig. 6 Female's forecasted cause of death : above 5 items

次いで「迷惑をかけたくない」26.8%，第3位「長生きしたくない」13.4%，第4位「寝ている間に死にたい」12.4%，第5位「天命、自然にまかせたい」「配偶者に看とられて死にたい」各9.3%の順であった。その他の理由を含めて男女を比較してみると、男子の場合「長生きしたい」「節目を越えるまで生きたい」といった長寿を望む者が女子を上回り、「長生きしたくない」「配偶者に看とられて死にたい」など短命志向の者が女子に多くみられたことは、望む寿命にみられた男女差を裏付けている。また、男子の場合、「やるべきことをやりとげてから」「恰好よく、男らしく死にたい」「遺産(金)を残せる死に方である」「惜しまれて死にたい」「仕事に命をかけて死にたい」などの理由を女子より多くあげており、そこに人生に対する積極性、社会性がみられる。一方、女子の方は「好きな所で死にたい」「きれいに死にたい」「配偶者と共に死にたい」「老後を楽しんで死にたい」などの理由を男子より多くあげており、これらの理由は個人的・情緒的であるといえる。

次に、あげられた主な望む理由ごとに、それぞれの望む寿命及び望む死因との関連をみてみた。「苦しい死に方をしたくない」をあげた者240名の望む寿命は29歳から100歳に亘っており、平均72.1歳であった。そして望む死因は「老衰」40.4%、「心臓病」23.3%、「不慮の事故」16.7%、「脳血管系疾患」10.4%などであった。

死における肉体的苦痛については、精神分析学

者のフロイトが皮膚がんで闘病中に、医師に対して「もしどうしても苦しんで死ななければならぬとなれば、ひとつ、君、きれいに死ぬるよう、手をかしてもらえないだろうか？」といったといわれ¹²⁾、さらに時実利彦によれば「自覚した死にまさる苦痛はない」といつているように¹³⁾誰もが避けたい恐怖の1つである。しかし、「老衰」「心臓病」「不慮の事故」「脳血管系疾患」が間違いなくその恐怖を取り除くかどうか疑問である。また仮に「老衰」がこの苦しみからのがれられる死因であったとしても、老衰死の確率は極めて低いため¹⁴⁾非現実的な高望みということになる。

「恰好よく・男らしく死にたい」をあげた者36名の望む寿命は21歳から100歳に亘っており、平均51.7歳の短命であった。そして望む死因は「他殺・暗殺」41.7%、「戦死」36%、「事故」(殉死的な事故をあげているものが多い)19.4%などであった。アリストテレスは「最も恐いものは死である」としながら、「最も美しい死とは戦死である。なぜならそれは最も大きな最も美しい危険に於ける死だからである」¹⁵⁾と言っているように、戦死や殉死を美化する考え方は古くからみられるが、一部の大学生とはいえ、そのような考えにあこがれるのは望ましくない。自らの生命を投げ出すような死を望むのは、フロイトのいう¹⁶⁾死の本能なのか、日本人特有とされる武士のいさぎよい死の覚悟なのか¹⁷⁾、その奥底をよみとることはできないが、死は生の結果であるはずなのに、いかにも死

Table 4 Actual state of the hoped reason (%)

Items	Sex		
	Male n=534	Female n=97	Total N=631
1. Don't feel like dying painfully	35.6	52.5	38.2
2. Feel like dying peacefully or calmly	17.4	8.2	16.0
3. Don't want to put others to troubles	12.2	26.8	14.4
4. Feel like trusting natural term of life	10.9	9.3	10.6
5. Feel like dying while sleep	9.0	12.4	9.5
6. Don't want to live long	6.9	13.4	7.9
7. Feel like dying after do one's part	6.7	5.2	6.5
8. Feel like dying looking well and manfully	6.4	2.1	5.7
9. Because average cause of death	5.6	4.1	5.4
10. Don't want to feel pain because of a struggle and down for a lifetime	5.4	4.1	5.2
11. Don't want to live till grow senile	5.1	4.1	4.9
12. Feel like dying on one's favorite place	4.5	6.2	4.8
13. Feel like dying while watching by spouse	3.9	9.3	4.8
14. Want to live long at any rate	3.9	2.1	3.6
15. Want to live till over the point	2.4	1.0	2.2
16. Feel like dying with regrettable	2.2	2.1	2.2
17. Feel like dying of one's own will	2.1	3.1	2.2
18. Fell like dying beautifully	1.5	6.2	2.2
19. Feel like dying after left a legacy	2.2	0.0	1.9
20. Feel like dying with work at the risk of one's life	2.2	0.0	1.9
21. Don't want to die putting to shameful conduct	1.9	2.1	1.9
22. Feel like dying after enjoyed one's old age	1.7	3.1	1.9
23. Bcause of dream, prophecy or luck	0.9	3.1	1.3
24. Feel like dying with a spouse	0.7	3.1	1.1
25. Feel like dying after ascertain the change of the world	0.6	1.0	0.6
26. Feel like dying within a energetic	0.3	2.1	0.6
27. There is nothing for live but to dead	0.6	1.0	0.6
28. In some way	0.7	1.0	0.8
29. The others	2.6	2.1	2.5
30. No answer	0.3	0.0	0.3

が目的であったり、手段として考えられている特異な例といえよう。

「自分の意志で死にたい」という理由をあげた者14名の望む寿命は21歳から100歳に亘ってちらばっていた。そして望む死因としてあげられたのは「自殺」64.3%、「安楽死」21.4%であった。自分の意志で死を選ぶというあたかも主体的であるように聞えるが、自殺の多くは逃避願望の結果であると考え得る¹⁸⁾こと、「安楽死」が森鷗外の高瀬舟にみられるように「死にかかっている死なれずにいる人を死なせてやる」¹⁹⁾という他律的なも

のであるとすると、安易に人らしい死に方とはいえないであろう。しかし、死のレディメイド化²⁰⁾というようなことが懸念される最近の世の中において、生きる権利の放棄あるいは死ぬ権利といった面から主体的な安楽死あるいは尊厳死は今後の課題として残る。

「配偶者に看とられて死にたい」という望みをあげたものは30名であるが、かれらの望む寿命は35歳から100歳に亘っており、平均76.1歳であり、80歳以上まで長生したうえで配偶者より先に死にたいとするものが11名いた。そして、望む死因と

して「老衰」53.3%、「心疾患」13.3%、「脳血管系疾患」10.0%などがあげられた。沢田愛子は「死の恐怖の最大のもは絶対的孤独への恐怖である」²¹⁾ といっているが、この恐怖の緩和を意図しているのか、自らが配偶者を失うことの恐怖（悲しみ・不安）からのがれることを意図するのか、あるいはいずれおとずれる配偶者の看護のめんどろからのがれることを意図するのかかわからないが、いずれにしても自分本位の望みでしかないといえる。おそらくまだ配偶者といえる相手を持たない学生にとって、配偶者を失なった者の限りない悲しみと絶望を理解することはできないのかもしれない。長生きしたくなるような配偶者との出会いに期待がもてる生き方について考えさせる必要がある。

「長生きしたくない」という望みをあげたもの50名の望む寿命は21歳から100歳に亘っており、平均は60.32歳で短命である。そして望む死因は「老衰」22.0%、「心臓病」22.0%、「不慮の事故」18.0%などである。60歳を越えたら「老衰」で死にたいといった無知、無気力な回答もみられるが、全般的に生きがいを感じられない自らの生活、あるいは社会に対する痛烈な批判ともとれる回答である。京都大学のカウンセラーである石井完一郎がいつている『今日の裕福社会の中で同じような「炉辺の幸せ」を求めて迷わず、ワン・パターン「無気力さ」の中に「死んでいる」としかいえない大人しく均一化された多くの若者たち」²²⁾ と同じ学生のものである。これらの学生に長生きしたくなるような気力を持たせることは容易でないが、取りあえずは健康教育の改善等の方策が急務であろう。

「迷惑をかけたたくない」91名(14.4%)、「闘病・寝たきりで苦しみたくない」33名(5.2%)、「ボケるまで生きたくない」31名(4.9%)、「自分で動けるうちに死にたい」4名(0.6%)というようなことを望んでいる者も少なくない。このようなことについて、医事評論家の水野筆は『いちばんいやだと思う「寝たきり」や「老人痴呆」にならないという保障はない』²³⁾ といっているし、また分子生物学者の渡辺格も「体は丈夫で頭だけおかしいということでは、当人もはたも困る。また頭はしっかりしているが、体の方はだめになっているということでも困る。両方がバランスがとれてやがて安らかに死んでいけるということが望ましい」²⁴⁾

といっている。

高齢化社会における大きなかつ急を要する問題といえるが、問題意識ばかりが強調されても、対策が具体化しなければ人々の不安をつのらせ、当事者達の肩身をせまくするだけであろう。高齢者が遠慮しないで生きられる道を開拓し、普及しなければならぬ。

「きれいに死にたい」14名(2.2%)「醜態をさらしたくない」12名(1.9%)といったことを望んでいる者もいるが、その中には交通事故で見苦しく死にたくないというような情緒的な意味のものもあれば、三島由紀夫のようにきれいに死にたいという者もいた。浜田靖一によると、三島由紀夫は「自分の肉体が理想的な美しさを備えてきた時に、氏を慌てさせ、氏が恐れたのは実に日々近よってくるアノ老醜の足音であった」²⁵⁾ と哲学的な意味で論じている。いずれにしても、単なる見た目よりも精一杯生き抜いた姿がきれいにみえる価値観の形成が必要であろう。

以上のような大学生の望む死に方の実態をみると、望む寿命や死因ともに非科学的であったり、現実離れしていたり、社会道徳に反していたりする望みも多くみられた。これはやはり大学生の「死」に関わる知識や経験の誤り、片寄り、不足によるものと考えられる。このような死に対する意識からは積極的な生き方への示唆は得られないであろう。しかし、一部の学生にとって死は深刻な思考の対象になったり、主体的な寿命の延長や死因の選択を考える機会になっている点も見逃せない。今後、「死」を生むために学びその「死」から「生」を得るように適切な指導が必要と思われる。

IV. 結 論

大学生の「死」に対する意識調査を行なったところ次のようなことが明らかになった。

1. 予測寿命は男子65.7歳、女子67.6歳であり、最近のわが国の平均寿命を男女とも下回っていた。
2. 予測死因は「悪性新生物」をあげた者が男子39.3%、女子30.9%に及んでおり、厚生省の確率統計の値を大きく上回っていた。
3. 寿命や死因を予測した根拠をみると、「遺伝・家系」をあげた者が男子20.2%、女子39.2%で最も多かったが、複数の根拠をあげ

た者は少なかった。

4. 望む寿命は男子72.9歳,女子69.1歳であり,わが国の平均寿命を下回ったが,予測寿命は上回っていた。
5. 望む死因は「老衰」をあげた者が男子51.1%,女子36.1%に及んでおり,厚生省の確率統計の値を大きく上回っていた。
6. 望む死に方の根拠をみると「苦しい死に方をしたくない」をあげた者が男子35.6%,女子52.5%で最も多かったが,不穏当な死に方を望む学生も一部に見られた。

以上のように,大学生は寿命や死因の予測において誤った予測をし,望む死に方をみてもおよそ非現実的な望みを抱いていたことから,彼らの死に対する意識は不適切であるといえる。今後,彼らの死に関わる知識や経験の誤りを正し,片寄りをなくし,不足を補っていくような働きかけが必要である。

参 考 文 献

- 1) アルフォンス・デーケン編:死を教える,メデカルフレンド社,1986
- 2) アルフォンス・デーケン編:死を看取る,メデカルフレンド社,1986
- 3) アルフォンス・デーケン編:死を考える,メデカルフレンド社,1986
- 4) 平山正実,A・デーケン編:身近かな死の経験に学ぶ,春秋社,1986
- 5) 樋口和彦,平山正実編:生と死の教育,創元社,1985
- 6) 藤沢邦彦:健康阻害要因に対する意識と保健行動,筑波大学体育科学系紀要第7巻,1984
- 7) 河上利勝:いのちの医学史的考察,メデカルフレンド社,pp.7-8,1981
- 8) 井上忠:死の試論,理想No.477,理想社,pp.2-3,1973
- 9) 厚生省:死亡因別死亡確率,国民衛生の動向昭和60年版,厚生統計協会,pp.79,1985
- 10) 岸本英夫:死を見つめる心,講談社,
- 11) 井村和清:飛鳥へ,そしてまだ見ぬ子へ,祥伝社,1980
- 12) 中野好夫:人間の死に方,新潮社,pp.120,1970
- 13) 時実利彦:生命の尊厳,潮出版社,p.349,1973
- 14) 朝日新聞科学部編:人間,その誕生から死まで,朝日新聞社,pp.218,1976
- 15) 今道友信:行為と美,理想,No.483,理想社,pp.111,1973
- 16) N・O・ブラウン著,秋山さとる訳:エロスとタナトス,竹内書店新社,1975
- 17) 相良享:日本人の死生観,ペリかん社,pp.37,1984
- 18) 総理府青少年対策本部編:子どもの自殺防止のための手引書,大蔵省印刷局,pp.14,1981
- 19) 神津拓夫:安楽死,現代のエスプリ第34号,至文堂,pp.195,1968
- 20) 吉村真司:現代における死の神話,前掲書8),pp.76
- 21) 沢田愛子:死と孤独,前掲書5),pp.111-112
- 22) 石井完一郎:青年の生と死との間,弘文堂,pp.253-254,1984
- 23) 水野肇:夫と妻のための死生学,中央公論社,pp.217,1986
- 24) 渡辺格:新しい人間観と生命科学,講談社,pp.145,1983
- 25) 浜田靖一:文芸作品の中の体操教師,泰流社,pp.75,1977